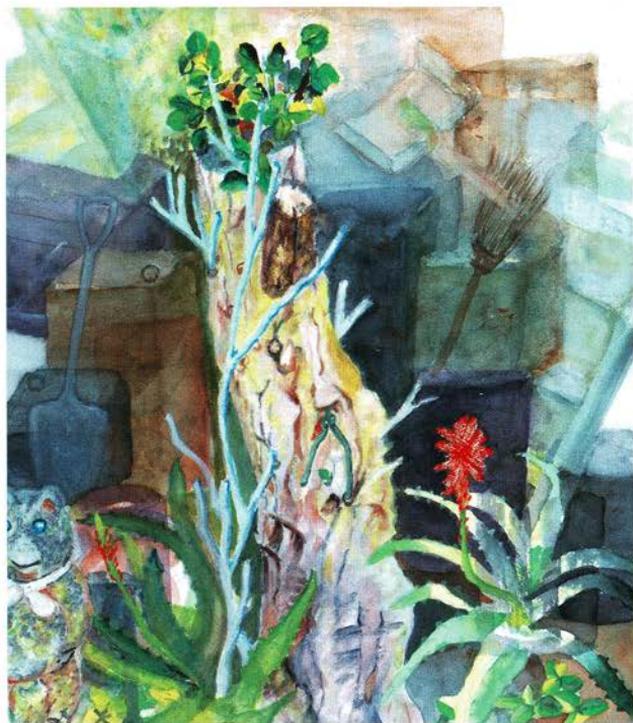


村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)8月号

門倉弘泰追悼特集

第98卷

第8号

通卷1088号

二〇二一年(令和三年)八月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第八号



香 蘭

2021年(令和3年)8月号
門倉弘泰追悼特集
第98巻 第8号 通巻1088号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(72)	2
	近詠十五首「火星」	4
	一	24
	二	59
	三	65
	推薦香蘭集	66
	香 蘭 集	17
	一頁公論(3)「私を短歌に導いた二人」	18
	作品一特選(六月号)	17
	飯島・石井・伊藤(康)・岩田・大井田・川原・ 小林(唯)・鈴木(桂)・満木・森田(徹)	18
	作品二・三特選(六月号)	20
	青山・江口・小原・関・竹本・中井・藤本・ 三澤・篠永・田中・渡邊(典)	20
	村野次郎への旅(136)	22
	千々和 久 幸	31
	門倉弘泰追悼特集	31
	エッセイ・自由研究	31
	「源実朝公の和歌の功績を称える	72
	鎌倉鶴岡八幡宮の催物より」	72
	焦 点(六月号)	74
	「コロナ禍の生活のなかで」	74
	丸山・飯島・原(卜)・福本	76
	七首抄(六月号)	77
	関口静子「横須賀」評(六月号近詠十五首)	77
	作品一	78
	宮口弘美	80
	作品二	82
	八木橋洋子	82
	作品三	84
	関口静子	84
	香蘭集	86
	渡邊典子	86
	文法あれこれ(27)	88
	満木好美・小原裕光	88
	緑地帯	90
	歌会及び会合・会員消息・他	90
	編集後記・新宿日記	94
	表紙絵	94
	中村 陽子「おしゃべりな木」	94
	目次・緑地帯カット	94
	和田 和雄	94
	関 哲行	表二
	中村 かよ子	表二

追悼特集

目次

略歴・写真頁……………34

〔会 員〕

(氏名五十音順)

門倉弘泰作品四十首抄……………43

〔選者・元選者〕

千々和久幸……………47

香山 静子……………48

丸山三枝子……………49

森 幸子……………49

朝香ふさ枝……………50

飯島智恵子……………50

市川 義和……………51

小原 裕光……………52

近藤 光子……………53

高島 憲子……………54

長野 道子……………55

西野美智代……………55

能城 春美……………56

松井 芳子……………57

脇谷 房子……………58

村野次郎作品 私の愛誦歌（72）

まなかひに聳えんビルをうかべつ、

ゆるがぬ礎石今日ここに据う

〈明宝ビル西側玄関、右側に彫り込まれている作品。表記もそのまま〉

これは昭和四十三年、先生が施主の明宝ビル
工事中に礎石を設置した際の作品である。

上の句では工事完成後に聳え立つ明宝ビルの
姿を、愛し子の成長を夢みるかのように思い浮
かべておられる様子が窺える。

下句の「ゆるがぬ礎石」は先生の信念にもつ
ながら、確固たる意志が感じられる。私には無
言の激励を受けているように思える。先生七十
四歳の時の作品である。

昭和四十年代のあの時期に、新宿のど真ん中
にビルを建設することを決心されたその気概と
先見の明に敬服する次第である。

この作品は明宝ビル西側玄関の右側の壁面に
彫り込まれており、当ビルを利用する人やビル
前の歩行者も目にすることができる。

左側には明宝ビル完成の喜びの作品「日をつ
ぎしとゞろきをへてこの朝のビルはひかりをあ
びてそびゆる」が彫り込まれている。

（短歌研究文庫『村野次郎歌集』25頁、『村野次郎三
百首』99頁に掲載）

四 選 者 の 作 品

みな遠き 平塚 千々和 久 幸

逢いたいと遠き電話に告げており生きていろよと言わん代わりに
黄砂降る博多を二十歳のわたくしがダスター・コート着て歩みおり
ドラマとは遠きひと日と思いつつ人の後ろに電車を待てり

負けてやるのが肝要などと言いきみにカリフォルニアワインを注ぐ
デラシネにあらざるはなし懂れを未だ抱えて浮世に汚る

菖蒲会は同期会にて這つてでもと言いたる友が死にてしまえる
元氣だったあいつも死んだかかえずこにか初蟬の声している今朝は
妻あらぬ暮らしに慣れてたらの芽と目刺しで今宵の晩酌始む

これからも 我孫子 丸 山 三枝子

これからも締切日はくる四時半になれば米研ぎ風呂水を張る
満月のうさぎは見え古疵のようなる影をドラマは見する
ひそひそと紙片を燃やしている部屋もいつしか丸ごと燃えているなり
ゾルピデムこのごろ効かず日傘さし布施弁天の境内を行く
櫛造りの布施弁天の楼門の木彫りの亀の甲羅うく見ゆ
板に額よせて一まい一まいと亀甲紋を彫りすすみけん

ずんどうの丸いポストの懐かしさレターバックは入らないけど
辿りゆくことなき路地のいくすじか朝の車窓に見えては過ぎつ
寝 待 月 東 京 桜 井 京 子

新緑の中に残れる袖子の実は去年の袖子なり大馬鹿の袖子
ペランダに小綺麗な花が咲き始めすこし嬉しいハルノノゲシは
出掛けたら必ずもどつて来る人よ蠶の朝出掛けてゆけり

春昼の闇 甘やかなくらがりと思ひぬ暗渠といふは
熱湯を注いで五分そんなには待てないのだよもう日が暮れる
よふかしをしてゐるあなたお疲れさま寝待月なり少うし欠けて
寝て待てばそのうちきつといいこともあるさ 甲羅を干してゐる亀

川崎へけふは来てをり来る人も来ない人もあるコロナ歌会は
あな憂あな憂 横 浜 渡 辺 礼比子

だいじょうぶだいじょうぶまだだいじょうぶ この頃ときに独り言う
レターバックあなたに届き追跡用シール捨てたり この春もゆく
かわたれの床に聞こえしうぐいすの声励みおたりたそがれてなお
この夕べミモザ咲き満つ風来ればあな憂あな憂と身を揉みながら
カラオケの声と手拍子響きおりパブ(あほうどり)コロナは知らず
白塗りの鉄の鳥居は錆だらけ わるくち言うと罰が当たるよ
定位置にものがあればいい整っていないなくてもいい 夫病みて言う
ホームより「食事は自力で完食」と便りあり 母と三月会わざる

作品一特選



(六月号作品から)

香山静子 選

此のころ

川崎 飯島 智恵子

掃きおえし庭に折よく降る雨を慈雨といたたく花粉症なり

「間隔をあけて下さい」五人掛けのベンチに座る三人の一人が

おばあさんがおばあさんの手をとりてゼブラゾーンを渡り終えたり

発車まで十五分ある「青柳」のうぐいす餅を買って帰らな

新宿が又遠くなる研究会歌会中止の知らせを受けて

・真面目な内容でもユーモアを感じさせる作者

さまざさま桜

習志野 石井 雅子

「歌詞なんて口から出まかせペラペラと」若きなかにし礼は言ひしが

現代で言ふチャラ男^セなりしが胸奥に「石狩挽歌」の風景持てる

ケンゾーのスカーフお気に入りだつた月面を人が歩いた頃は

漁師町の路地を歩いてゐるだけでセンチメンタル・ジャーニーとなる
キムタクがをつさんになりわが娘をばさんになりわたしはをば
忘れても心のノートに今日のこと乗はさんで仕舞つておくよ
・敏感に時代の流れに反応し歌の素材にしている。

十年目の春

東京 伊藤 康子

各局が競って震災特番を放送したりイベントのごとく

あれからと年月を勝手に数えてる寄り添い続けてきたふりをして

道沿いのかりん樹ピンクの花見せてここにも春と小さく手を振る

お客様のおっしゃる通りでございませす相槌打ちつつ収まるまでを

間違つたこと言つてるかと言ふ客に大間違いですと言ひそうになる

・個性的な作品が多いが中でも四首目、五首目が極立っている。

祥月命日

安来 岩田 明美

さみどりの露の薑味噌を飯に添へ祥月命日の姑に供へる

止みてまた息吹き返す春風に香箱座りの猫たちろがず

深々と春呼ぶ雨の降る夜は産土の地に浸り眠らむ

しつとりと匂ふ土から抜け出でて太き蚯蚓やぬめぬめと春

雛飾る公民館の若き主事木綿のブラウスの白きが眩し

・季節のうつろいに敏感な作者の歌を楽しみにしている。

包丁

川崎 大井田 啓子

出刃包丁、刺身包丁、三徳をバッグに入れて研ぎ屋へ向かふ

わたくしのバッグに出刃のあることを誰も知らない 真昼間のバス

包丁の錆を落とせば積年の思ひ出さつぱり消え失せさうで

結婚はすなはち包丁を買ふことと疑はずあき キッチンに立つ

研がれたる包丁三本ひさびさに光もどれること楽しむや

引越しのたびに包丁三本も移り住みたり錆増やしつ

・主婦の鑑のような作者の気構えがたのしい。

とても暇です

川 越

川 原

優 子

シクラメンの大きな鉢が三百円見向きもされぬ春三月は

電話してお忙しいのに悪いわね いえいえ今日はとても暇です

おしゃべりと無口のどちら好むかと問われほどほどが良しとは言わず

直球を投げてもみたい本当はあなたのことは大嫌いだと

ノックする形に指の関節でエレベーターのボタンを押せり

・物事に対する反応の敏感な若さが眩しい。

薬師寺の塔

長 野

小 林

唯 見

薬師寺の東の塔の修理成り特別開扉と気持が弾む

薬師寺のとりこになりしは東の塔の姿に魅せられてより

玄関に自分で撮りし東塔の写真を飾り納得する日々

東塔の原の形の復元の西塔うるはし見たる幸せ

・東塔への並々ならぬ思い入れが滲み出ている。

春

西 宮

鈴 木

桂 子

まどろみの中に聞きみる鳥のこゑやうやう明けて春はあけぼの

あたたかき冬の続けば水仙は葉ばかり伸ばし咲くを忘れつ

ペン立ての赤・青・緑の幾本に今宵のこころ満たさむとする

何を待つわれの夢にかたがた今は生きて死ぬことそれだけである

カーブしてぐーんと駅に入りゆく夜の電車はどこかさびしい

・対象への迫り方に独自性があり、感性の鋭さもある。

三月の光

川 越

満 木

好 美

一合の米を炊きたり子供らが居たころと同じ大きな釜に

三月の光たたえる窓辺にて明日につながる話しようよ

枯枝と見えしテッセン春風に小さき荳をいくつも持ちぬ

置く場所を少し変えれば五年ぶりに荳をつける鉢の椿は

・どの作品からも生あるものへの優しさが滲み出ている。

哲人のごと

福 岡

森 田

徹

終極は大吟醸百本飲み干して妻にはあばよと気取るもありか

大量の葉を朝は飲む時間クタバリも近いと思いつつ飲む

八十六の俺が間もなく対峙する最後の勝負その負けが死か

人生と取っ組み合つて生きてきた後悔のない日は数えてもない

・後悔のない人生はないと言う。それも又人間らしさか。

作品二、三特選



(六月号作品から)

渡辺 礼比子 選

〈作品二〉

自分史 米子 青山 侑市

自分史は自慢話に虚を混せて著すものと思ひて記す

開けたればマスク五枚が出で来たる焼香のみの香典返し

野畑のペットボトルはもぐら除け終日プロペラ音立て回る

この瞬時留めおかと詠ひたるメモ書き程度のわが身辺詠

焼酎は脳梗塞の予防として永年嗜む実験のため

・自らを笑いの対象にして、客観的な目し分析をする。

桜咲いたよ

柏 江口 絹代

椅子の足をきまして見る韓ドラの最終回に涙している

家猫の草地を歩く姿さえおどけてみえる春は楽しき

赤玉子割って嬉しい朝餉なり桜咲いたよと子に教えらる

夢の中をふらつきおりし魂か心身ほどけて悲しみ残る

そら豆の花の色など忘れおり緊急事態に振り回されて

・五感を解放して詠む。四首目は捉え難い感覚を追及した意欲作。

滑川 鎌倉 小原 裕光

和寒のカボチャの話題で盛り上がる北の地に住む友とのライン滑川の岩伝い来し黄鶴鶴は琴弾橋の朱をくぐりゆく

駅伝のニューイヤール観て箱根観て走った気になるこの三箇日

緊急事態の中継最中に流さるる米国議会への暴徒突入

米国の大統領の陰謀を目のあたりにするこの年の春

・四、五首目、物情騒然たる時世を詠む。二首目の叙景歌は凝縮が課題。

喜寿 大分 関 哲行

庭木々に新芽出ずると見ていたる三月二十日春一番吹く

独り居の気儘な朝湯に浸る降りしきる雨の音を聴きつつ

コンコンとビールの栓を二度叩きおもむろに抜く喜寿誕生日

近頃はとんとご無沙汰の瓶ビール一本空けぬ喜寿誕生日

貪りは自滅に向かうと教われどそれでは勝てぬ碁の勝負には

・気儘なシニアライフを楽しむ自画像が軽妙に描かれている。

春の憂鬱 千葉 竹本 幸子

すれ違う袴姿の乙女らのハレの日子きょうを街に見送る

メディアでは正義ばかりがものを言いマスクの中の息が苦しい

失敗は許されないと世の風にだるまさんずつと転んだままか

昼カラでクラスター出たとぞアクティブな老人疎まれ春の憂鬱

春来れどウイルス感染おさまらず人は孤独になるばかりなり

・社会批評の視点を持ちつつ、当世の人々の姿を哀感をこめて描く。

意外に好評

宇治 中井房江

この人の車に乗ればいつだって米朝が落語かたりているよ
抹茶館のかりんとう饅頭「宇治川で拾った石」は意外に好評
境内の巨木伐られて鎮守社の屋根の落ち葉に陽の当たりたり
天仰ぎ疾風に立つハシブトよ迷っているか決心したか
週末ごとに渡月橋の映されて橋行く人の咎のごとしも
・三十一文字の窮屈さをものともせず、伸びやかに呼吸している趣。

少々の狡

常陸太田 藤本 佐知子

家籠もる夫ことのほか明るくて今日は農夫のいでたちにおり
いつになく空がやさしい少々の狡は許せとマスクをはずす
事なきを良しと過ごせるわれに今日小さき幸せ誰にも言わず
振り向けばついて来そうな猫がいて土手の傾りの草に花咲く
ほらあれが笹鳴きらしいしばらくを耳が喜ぶ犬が尾を振る
・日常の機微を捉え、哀歌ゆたかに詠む。二首目は上下の照応が鮮やか。

帰っておいで

横浜 三澤 幸子

去年失せし金槌庭に春陽あび半ば朽ちおり形保てど
うつかりの小さな火傷に何げない家事の動作が支配されおり
肩をポン続いて声が追い越せり「靴の紐が解けていますよ」
退職を決めたと息子告げきたり帰っておいで顔みて暮らそ
いつまでも出てくるようなふりをしてサラララップは突然尽きた
・インパクトのある口語遣いに注目。暈を孕んだ五首目には凄みがある。

〈作品三〉

こよなき時間

川崎 篠永路子

二首を捨て一首拾いてまた消して迷走したがついに投げ出す
捨て歌も読み上げられて批評され歌会果つれば批評が残る
外に出でて思いがけずに生れし歌 雫を受けとるように書き留む
歌に向きそれぞれが思う考える批評の一步のこよなき時間
・創作と四つに組む姿勢がよい。四首目下句はさらなる掘り下げを。

ぺんぺん草

取手 田中 あさひ

早春のプロローグはもわが庭の連翹の花の黄なるつぶやき
連翹にバトンわたされ咲くべしくれなるにほふ花桃のはな
外に出でよ空をあふげとわれをよぶ庭の花桃ふくらに蕾み
あしび咲く駅前坂のぼるとき馬にかも似む息はずませて
無名こそ好かれ道にも畑にも踏まるとも咲くぺんぺん草は
・文語を自在に駆使したりズミカルな調べが心地よい。

無量光

鎌倉 渡邊 典子

たちのぼる朝霧のごと花みえてめぐりの丘は一文字の〈春〉
ふくよかに椿は時間を留めめたり去夜より続く弥生の雨に
歩みきていつしか縄目のゆるぶまで菜の花畑に無量光ふる
父に似る吾と母の弟とかたみに持病を語る彼岸会
・趣向を凝らした歌も魅力的だが、四首目のような自然体の歌もよい。

火 星

中村かよ子

初めての火星の音が擦り切れたテープのように私を起こす

人類の指先がちよつと触れたので火星が身震いしたような音ね

もう夢ではないと火星が告げた音私のものではもうない火星

空っぽのペットボトルを振ってみて 火星がないてる音がするから

遠き日の輝いていたニュータウン終着駅に君が降り立つ

あの頃は未来に見えたニュータウン終着駅には希望があった

君からの葉書一枚旅に出たと差出先はあのニュータウン

先のない終着駅はいかがですあの人はまだ君といますか

鶏頭の咲き切る力あか赤と廃屋に陽の早々と落つ

何者でもまだない少女の黒髪が波立つ己が周波数さがし

何者かになろうとある日少年は胸の第一ボタンを外す

ひと言随想

火星の音

マッチ擦ることなど知らぬ少女らが明日をさがすスマホ灯して

ほんのりと熱持つスマホ掻き抱き少女が跳んだ蛍のように

ほらあの日語った未来に来たけれどコーラはやっぱり薬のにおい

私には許せぬ程のものはなく情ない程あなたを許す

NASAが「火星の音」というものを初めて公開したのは二〇二一年二月二三日のことだった。私はそれを早朝のBS放送で、寝惚け眼で聞いた。目はまだ開いていない状態で「火星の音」で飛び起きた。厳密に言えばそれは「火星の風の音」だったが、それは何と云えばいいか、ただ懐かしいとしか言えない。ない、何度も何度も想像の中で聞いた音で、やあ久しぶり、と私は頭の中で呟いた。その

日、私の想像上の火星は消え、現実の火星が地球の皆の共有物となった。

大好きな漫画、萩尾望都さんの「スター・レッド」を久しぶりに捲ってみる。私は相変わらず家にいることが好きな老年のオタクのようだ。これから人間は火星にコロニーを築くだろう。ノアの箱舟のようにあらゆる種を火星に持ち込むだろう。願わくは火星には地球と同じような歴史の繰返されませんことを。

「香蘭」創刊号を読む(三)

千々和久 幸

引き続き「香蘭」創刊号(大正十二年三月)を読んでみよう。作品欄の二番目に中河與一の「海の歌」十一首が掲載されているので、原文のまま左に引く。

海の歌

中河 與一

-
- ①まさやけき水のしたたり山道をゆきつかれ
つつ耳にとめたり
- ②保安林のなかの草道むしあつしとどろき聞
ゆ土用の大波
- ③荒波のたかきうねりに舟のさきあがると思
へけふとく下る
- ④來たりしと思ふ大波舟のしたに入りつつ舟
をつきゆすりすく
- ⑤夕潮は白くうちよせ引くときはかすかに砂
の音すみてひく

-
- ⑥手のとどくかぎりの壁はいちめんじに兒の
楽書の心ゆくわざ
- ⑦貧しさを言ひ居りし妻なりはひの疲れをも
ちてはやも眠れり
- ⑧屋根にあたるはげし雨の雨煙たちつつ風に
したがひなびく
- ⑨種にあまる大降りの雨水みだれ落ち輝かし
うつつ青き葉蘭を
-
- ⑩遊びつつ富める働くも生きがてぬ此の國の
今や二つとならむ(或る日に)
- ⑪まどしきはいよよまどしく富みたるはいよ
よ富みゆきいたく離れき

の記念すべき作品と言えよう。
作者の中河與一は後に『天の夕顔』によつて広く知られるようになるが、作家としてのスタートは川端康成、横光利一らと創刊した「文芸時代」(1924年)だった。
「香蘭」の創刊号が出たのは1923(大正十二年)だから、この一連は相前後して詠まれたものであろう。與一はわたしがまだ生憎気ざかりの「香蘭」で、二、三度顔を見た記憶がある。講演ではぼそぼそ喋る老人という感じで、さしたる印象はない。
さてこの一連十一首を通読した限りでは、近代短歌の作法に従い手堅く歌い納められている、という以上を出ない。小説における浪漫主義あるいは新感覚派(モダニズム)の旗手、という優美繊細なイメージは、この一連からは受け取ることは出来なかつた。
①⑤は、先に見た村野次郎の「冬日爐邊」と同じ詠い口の、いわば軽いデッサンの趣である。次いで⑥から⑨で注目したのは、やはりうら若き妻(歌人で「をだまき」主宰の中河幹子)を詠んだ⑦である。言うまでもなくまだこの国が貧しかった頃の作品である。
わたしが注目したのは、一連の最後の⑩⑪

の二首である。時代が一巡りも二巡りもしたにも関わらず、このような現実は今目読んでも古さを感じさせない。

今日ならさしずめ「格差社会」の現実を別出した歌ということになるが、社会の表層は変わっても資本制社会のもつこの基本構造は変わりようがないのだ。

一方に遊んでも裕福に暮らせる階層があり、他方に働いてもなお「まどしき」(貧しき)階層の存在する日本経済の二重構造が、宿痾のように今に続いている。⑩はその構造を概念的に捉えたものであり、この概念をパラフレーズすれば⑪の歌になる。

余談を一つ。本稿を書き継いでいる2021年(令和3)3月31日付の毎日新聞(夕刊)に、大見出しでこんな記事が載っている。

その見出しには「74万円接待＝家族1カ月の食費」とある。これは山田真貴子前内閣報道官(60)が菅義偉首相の長男が務める会社から、1人7万4000円超の接待を受けていた事実を報じたもの。そしてこの金額は、3人家族の1カ月の平均的な食費とほぼ同じ額であることを明らかにしたものの。

現下の弛みきつた政、官界の腐敗と墮落は

産業(財)界を巻き込んで、社会と人間のモラルを著しく劣化させている。政治家はもとより財界、マスコミまで正論が通らない社会は、戦後をはじめたのである。人間は過去の歴史に学ばないことがこの一件でも明らかだ。

それにしてもこんなおぞましい現実を露呈させて、この国の階層分化、格差社会は進行している。話が逸れた。今一度⑩に戻ろう。

⑩の歌意は掴めようが、「生きがてぬ」という言葉は、昨今の短歌ではとんとお目に掛かることがない。往古の文献で「読む」ことはあっても、自らの作品に「詠む」ことはまずなからう。

古語辞典によれば「かつ」||「がつ」(補助動詞、下二、上代語)…できる。…に堪える。動詞の連用形に付き、下に「ず」「ましじ」など打消の語を伴って、全体で不可能・困難の意を表す、とある。

したがってここでは(働いても)「生きる」とが出来ない。生きることに堪えられない」ということになる。

ついでにわたしは行き掛かり上(?)、このたび『天の夕顔』を大急ぎで読み直した。最初に読んだのは高校生の頃だったと思うが、

いかにも大時代的で、数頁読んで放り出したことを覚えている。再読して高校時代の第一印象は消えないものの、あるいはこの作品は永井荷風やアルベール・カミュが激賞するほどの世界的名作ではないかとも思ったことだった。

それほどにここに描かれている熱愛(純愛)は愛の本質をドラマチックに拘って感動的であるだけに、どこか嘘臭いという印象が今も拭えないのである。さらにこの小説の解説を「日本浪漫派」の巨魁とも言うべき保田与重郎が書いていることである。

わたしは若い時分から保田与重郎を超えるべき峰と仰ぎながら、実はまだその麓にも達していないからである。

保田は『天の夕顔』についてこう書いている。「この小説は人間の文化が最もけだかく美しいものを念願していた時代の人々のおもいを伝え、その時代と人々にあった愛の情緒と思想を、一つの行儀作法や躰として次の代の子女に教える」と。

わたしの書架には、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』(1960年刊)が眠ったままである。